

教育の未来を拓く ―多様な学びの創造へ

平川理恵 (ひらかわ・りえ)

横浜市立中川西中学校長

優秀な人材を学校内外から幅広く登用して学校運営に民間の経営感覚を取り入れ、学校教育を活性化させようという趣旨から、2000年に学校教育法施行規則が改正され、教員免許を持たず、教育に関する職に就いたことがない者でも学校の校長になることができるようになった。少し古いデータになるが、2010年4月1日時点で、全国43都道府県市で106名の民間人校長が任用されている^{*1}。2015年8月24日の未来研究会では、全国で初めて女性で民間から公立中学校の校長になった平川理恵さんを講師に迎え、彼女が目指す教育や具体的に実践していること、日本の学校現場が抱える問題等について語ってもらった。平川さんは横浜市の民間人校長公募で採用され、2010年から市ヶ尾中学校で5年間、2015年4月からは中川西中学校の校長として勤務している。

■成績は良いが、やる気のない子どもたち

国際的な学力調査として、PISA（OECD生徒の学習到達度調査）とTIMSS（国際数学・理科教育動向調査）が知られている。PISAは15歳が対象で、日本では高校1年生を対象に3年ごとに調査を行っている。TIMSSは、数学（算数）と理科の教育到達度を国際的な尺度によって測るもので、小学校4年生と中学校2年生を対象に4年ごとに行われる。

日本の子どもたちの成績を見ると、PISAでもTIMSSでも世界のトップクラスにいる。年や課題によって多少順位が変わるが、たとえば2011年のTIMSSでは、小学4年、中学2年ともに数学（算数）は5位、理科は4位である^{*2}。

一方で、学習意欲はどうか。TIMSSではアンケートも取っているが、それを見ていくと、中学2年で、「数学の勉強が好きか」「数学の勉強は楽しいか」



平川理恵

横浜市立中川西中学校長。1991年(株)リクルート入社。97年、南カリフォルニア大学大学院に企業派遣生としてMBA留学。帰国後の99年に退社し、留学支援会社を起業。2009年、横浜市教育委員会の民間人校長一般公募で採用され、市ヶ尾中学校長を経て15年4月より現職。文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会教育課程企画特別部会委員。著書『あなたの子どもが「自立」した大人になるために』(世界文化社)ほか。

という問いに「強くそう思う」と答えた割合はそれぞれ下から3番目、「数学を使うことが含まれる職業に就きたいか」に「強くそう思う」と答えた割合は最下位、得点が高いにもかかわらず「数学に自信がある」「数学にやや自信がある」も最下位である。これは理科についても、ほぼ同じような結果が出ている*3。

平川さんによると、これは今の教育が、子どもたちが主体的に学べるようになっていないからだという。まず、私立に行かない限り学校を選べない。何を使って学ぶか、いつ何をどういうペースで学ぶかも決められている。50分の授業中は、静かに座って先生の話聞き、板書をひたすら書き写すのがよいとされる。授業が終わるとチャイムが鳴り、10分休憩すると、また授業が始まる。確かに工場労働者のような学び方だ。

■教育の多様性を阻むもの

子どもが主体的に学ぶには、多様な学び方の中から、その子に合った方法を選んで学べるようにすることが必要だが、公教育には多様性を阻む要因があると見て、平川さんは次の三つを挙げた。

- ①学習指導要領と教科書の存在。日本が工業化を乗り切るためには効率的な学習方法だったかもしれないが、これがあるために、何年生はこれを、このペースで、この順番で、この教科書でやりなさいと規定されている。同じ時期、同じことを皆が同じペースで学ぶということが多様性を阻んでいる。

- ②私立のように建学の理念がない。ヒト・モノ・カネが自由ではない。校長

はじめ教職員が短期間で異動するので、ノウハウが蓄積されない。

- ③先生が忙しすぎる。クリティカルな意見が通りにくい。特に中学校は部活動が大変で、朝は7時から、夕方も6時まで部活をやってから教材研究や会議に入る。土日でも練習や試合で、ほとんど休みがない。クリティカルは「批判的」と訳されるが、他面、議論の多様性・多層性を促進するものだ。クリティカルな意見が言えないと、思考・判断・表現の「思考力」がつかない。学校評議員は教員に言えないし、保護者も学校に言えない。教員も言われ慣れていないし、言われたことにどう対処していいのかわからない。

■いかなる障壁があっても、できることからやっつけていこう！

多様性を阻むものはいろいろあっても、平川さんは「いかなる障壁があっても、できることからやっつけていく」と決め、様々なことを実践している。講演では以下のような取り組みの紹介があった。

- 普通の授業を広報する：必ず1日に1コマ、予告なしで突然授業を見に行き、授業中の先生を写真に撮って「学校だより」に載せている。中学校では、先生が授業を一生懸命工夫しても、生徒が褒めてくれることはないし、中学生は家で学校の話をしないので、親は先生が何をやっているのかわよく知らない。だから、平川校長が広報部長になって、宣伝している。「学校だより」は地域にも配っているので、それを見て、「先生、がんばっているね」と声をかけてくれる方もいるそうだ。
- 特別支援の充実：不登校や発達障害の生徒の支援として校内に学習ルーム（特別支援教室）を作り、不登校専門の部門から教員を引き抜いて配置した。教員の定数が決まっているので、余分には配置してもらえないが、先生方をお願いして少しずつ授業時数を多く持ってもらい、1人分の稼働を確保した。市ヶ尾中学校では、特別支援教室ができた途端に、15～16人いた不登校の生徒がゼロになったそうだ。
- キャリア教育の充実：通常の授業の中にゲストスピーカーや外部講師を入



れている。導入か進化・発展のタイミングで呼ぶのがポイントだそうだ。たとえば、中学3年の理科で遺伝を学ぶ導入として、大日本住友製薬のゲノムの研究者に、「現代科学は人を幸せにするのか」というテーマで授業をしてもらった。中学2年の国語の授業では、『アイスプラネット』を学んだ直後に、著者の椎名誠さんに来てもらった。他にも、学校の卒業生に赤ちゃんを連れてきてもらい、男子生徒にも抱っこしてもらおう機会を作ったりしている。

- ・ グローバル教育：博報財団の支援で、ベトナムに生徒を何名か連れて行った。学校にもロシア、ベトナム、トルコなどから子どもたちが来て、一緒に授業を受けた。「マイケル・サンデルの白熱教室」には8名を連れて行った。全員に公平には無理でも、できることからやっていくと、学校でその子たちがインフルエンサーになってくれるそうだ。
- ・ コミュニティ・スクール：市ヶ尾中学校は2011年度から、中川西中学校もまもなくコミュニティ・スクールになる。平川さんによると「コミュニティ・スクールの目的は、辛口の友人を学校に取り入れること。学校運営協議会は最大の応援団でもあり、どんどん意見を言ってもらおう」。
- ・ 図書室のリニューアル：いま高校生の不読率（1カ月に1冊も本を読ま

ない割合)は、50%以上に達している*4。この年齢で本を読まなければ、一生本を読まなくなる。どうにかしたいと、市ヶ尾中学校で図書室をリニューアルした。児童文学評論家の赤木かん子さんにプロデュースしてもらい、PTAや地域のボランティアと一緒に、書棚はもちろん天井から床まで磨き上げ、図書を半分ぐらい入れ替えた。赤木さんは「本嫌いの子なんていない。あるとしたら読みたい本が学校図書室にないだけだ」とおっしゃったそうだ。校長室のソファを図書室に移し、じゅうたんを敷いて寝ころがるスペースも設けた。平川さんは「図書室のレベルが上がると学校の文化が変わる」という。彼女が離任する前には、市ヶ尾中学校で哲学書がブームになったそうだ。中川西中学校でも、この1学期に図書室のリニューアルを行った。普通のどこにでもある学校図書室が、居心地のいい図書室に生まれ変わり、昼休みには200人の生徒が来るようになった(リニューアル前は15~16人)。平川さんは、娘さんの小学校でPTA会長もされているが、そこでも学校に働きかけて図書室を改革している。

- Dear 校長・公聴ポスト：校長室の前に公聴ポストを置いて、生徒の声を直接、聴いている。中川西中学校では、着任したばかりの4月に、1カ月で100通の投書があったそうだ。匿名も多いが、名前が書いてあるものには、必ず返事を書く。一筆箋に返事を書いて担任の先生に見せ、封筒に入れて宛名を書いて、先生から渡してもらっている。7月には、生徒同士のケンカの裏にいじめがあったことが投書から分かり、うまく対処できたということもあった。

図1 公聴ポスト



出所：平川理恵撮影

■みんなで未来のある子どもたちを育てていきたい

平川さんが強調したのは、「学校は20世紀型から21世紀型に変わらなければいけない」ということだ。黒板があって、みんな前を向いて座学形式で写経のようにノートをとる、軍隊・国家・宗教組織のように、権威者の言っていることが正しいと植えつけるようなヒエラルキー型から、ネットワークでゆるやかにつながるフラット型に変わっていかなければならない。

では、どうすれば変えられるのか。それには、多様な学びを創造して、その子に合った学び方を選べるようにしなければならない。彼女がお手本にするのはオランダの教育だ。オランダには、ピースフル・スクール、レオナルド・ダ・ヴィンチ・スクール、スティープ・ジョブズ・スクールなど、日本でいうオルタナティブ教育がたくさんあって、子どもが親と相談しながら学校を選べる。たとえば、ピースフル・スクールでは、子ども同士で紛争を解決するそうだ。ケンカがあっても、先生ではなく、メディエーター役の子どもたちが聞き取りから始めて、話し合って解決する。それを地域の大人が見ていて、自分たちの採め事もこうやって解決すればいいのかと、子どもたちから学ぶそうだ。

また、教育委員会はなくて、学校運営協議会のような理事会があって、そこがコンサルティング会社を雇い、学校の教員の研修や採用をしている。先生たちはそこから研修を受けて授業に特化する。ただし、先生たちの立場はファシリテーターで、知識を注入する役割ではない。小学校6年生の到達目標はあるが、そこまで行くのにどういう進み方、どういう学び方をしてもかまわない。読むこと、書くこと以外に、ビジュアルで勉強する子、音で勉強する子もいる。ハワード・ガードナー（Howard Gardner）の八つの学び方で試行錯誤して、それでも小学校6年生のレベルに到達しなければ、その子は学習障害ということになるが、それまでに個々の対応をしてくれる。自由が保障されていて、主体的に人生を選び取っていくので、とにかく子どもが幸せそうだという。

平川さんは、「自立貢献」を教育理念に掲げている。「これから未来を生きる子どもたちは、敷かれたシステムやレールの上を、ただただ受け身で依存して進むだけでは、この変化の速い時代、100歳寿命時代を幸福に生き抜いていくことができない」*⁵からだ。あらためて私たち大人の側が、どれだけ主体的に行動していて、幸せに生き抜いているだろうかと思う。私たちが幸せに生きられる社会でなければ、子どもたちの未来も幸福ではない。私たち大人から変わっていか

なければならぬと、強く思った。

(2015年8月24日開催)

註

★1—文部科学省「民間人校長及び民間人副校長等の任用状況について」

<http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/22/10/attach/1298539.htm>

★2—国際数学・理科教育動向調査の2011年調査 (TIMSS 2011) 国際調査結果報告 (概要)

<http://www.nier.go.jp/timss/2011/T11_gaiyou.pdf>

★3—同上

★4—『文部科学広報』第164号, 2013年7月号

<<http://www.koho2.mext.go.jp/164/index.html#page=25>>

★5—平川理恵 [2014] 『あなたの子どもが「自立」した大人になるために』世界文化社